

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：32677

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18H00934

研究課題名(和文) 在伯の日中韓移民メディアを文化外交論から再考する： ジャパン・ハウスの考察を軸に

研究課題名(英文) Rethinking the Japanese, Chinese and Korean immigrants' media in Brazil from a cultural diplomacy perspective: a focus on the case of Japan House

研究代表者

イシ アンジェロ (Ishi, Angelo)

武蔵大学・社会学部・教授

研究者番号：20386353

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はブラジルにおける日中韓の移民メディアの現況と課題の把握、日本の文化外交戦略の切り札として世界3都市(サンパウロ、ロサンゼルス、ロンドン)に新設されたJapan House(ジャパンハウス)の国際比較考察を主要な柱とした。移民メディアに関する研究では、中国・韓国系メディアについては基礎的な現況把握に留まったが、日系メディアについては研究期間中の劇的な激変(最後の日刊紙の廃刊と新たな媒体としての復活等)を捉えることに成功した。Japan Houseについては計画どおり、3箇所の施設の主要責任者への聞き取りを含む調査が実施できた。「東洋系」芸能人による民間の広報活動についても研究できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は少なくとも次の3つの意味で有意義である。1)今後の関連研究の基礎資料としての可能性：Japan Houseが各地で創設されたのは研究が開始された2018年であり、これを主題とした先行研究が皆無に等しいばかりでなく、同施設に関する報道や論考も少ない。2)移民新聞界の最新事情の把握：同研究の実施期間中にブラジルで最後の日系新聞が廃刊となり、媒体名も経営陣も刷新する形で再出発したが、移民メディア界の今後を考える上で希少な現在進行形の調査が実現できた。3)思わぬ副次的な成果として、ブラジルにおける日中韓の芸能人による共同での大手メディアへの抗議・発信活動について聞き取りと考察ができた。

研究成果の概要(英文)：This project aimed at capturing the current situation and issues of the Japanese, Chinese and Korean immigrants' media in Brazil, while conducting an international comparative study of Japan House, which was newly established in three cities around the world (Sao Paulo, Los Angeles, and London) as a key location for Japan's cultural diplomacy. As for the immigrant media, we were able to grasp the current situation of the Chinese and Korean media, and succeeded in capturing the dizzying drastic changes in the Japanese media during the research period (the last daily newspaper was closed and a new one was established). As for Japan House, we were able to conduct interviews with the main managers of three facilities as planned. We also done a case study of "oriental" artists that started a collective movement to protect the image and improve the status of the people of Japanese and other Asian origin.

研究分野：国際社会学、メディア社会学、移民研究

キーワード：ジャパン・ハウス 移民メディア ブラジル 日系ブラジル人 新聞 広報文化外交 日中韓 芸能人

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

研究を開始した当時は、海外での日本紹介の拠点として考案された Japan House の新設を機に、日本の広報文化外交が新たな局面を迎えている時期であった。Japan House はブラジル、英国、米国の3カ国に新設されたが、その共通点や相違点の比較考察は有意義だと考えた。本研究のもう一つの柱は移民メディアの現況把握であったが、研究開始当初の2018年はブラジルの日系移民新聞が未曾有の経営危機にさらされた転換期であった。また、ブラジルの最大手紙 *Folha de S. Paulo* によれば、最もしぶとく生き残っている移民新聞は日系、中国系と韓国系の「アジア勢」であったが、通称「日本街」のサンパウロ市内リベルダーヂ地区は実質的には「東洋街」であるものの、日中韓の移民メディアを比較する研究はなかった。

他方、2018年はブラジルへの日系移民110周年という節目の年であり、いわゆるデカセギ労働者として来日したブラジル人にとっては「在日30年」を記念あるいは総括するというタイミングであった。

2. 研究の目的

本研究の主な目的は次の二点に分けることができる。

(1)文化外交の拠点として新設された各国における Japan House の比較研究：世界3都市(ブラジル・サンパウロ市、英国ロンドン市、米国ロサンゼルス市)の Japan House をめぐって「官」、「民」、「メディア」がいかなる「Japan = 日本」の情報やイメージを発信するかを比較研究。
(2)ブラジルにおける日中韓メディアの比較研究および在日ブラジル系メディアの現況把握：ブラジルの中でも日中韓のエスニック・ビジネスやメディア企業の本社が集中するサンパウロ市内で、この3つのエスニック集団のメディア関係者への聞き取り調査を実施。サンパウロ市内で日中韓の移民集団が混在・共生する東洋街(Liberdade地区)を主な調査地として位置づけた。移民の若い世代の間で普及しているウェブメディアの実態や活用にも注目する一方、1980年代以降にブラジルから日本に渡った移民が制作・発信しているメディアにも着目した。

3. 研究の方法

本研究は主に次の3つの方法で進められた。ブラジルにおける日中韓の移民メディア企業の経営陣や編集者への聞き取り調査、および現物の収集。英米伯における Japan House の主要関係者への聞き取り調査、および各施設で発信されるコンテンツの比較分析。在ブラジルの文化外交に関わる機関、および民間の移民組織での聞き取り調査と資料収集。

ブラジルでの中国系・韓国系の移民メディアのデータ収集と聞き取り調査を実施し、すでに基礎データを有する日系メディアについては近況を把握。印刷媒体の存続が問題視される理由として SNS やデジタルメディアの普及が挙げられるのは周知のとおりであり、この潮流をメディアの生産者と利用者がどう捉えているのかについても注目。

結果的には、「研究成果」で詳述するとおり、ブラジルの日系人を中心とした「東洋系」の芸能集団による東洋系のイメージ向上運動について事例研究ができ、民間発の広報文化外交、しかも日中韓にルーツを持つブラジル生まれの芸能人が共通の目標を掲げて意気投合し、協働する活動についても調査した。また、比較考察の事例として、ウチナーンチュ(沖縄系)移民の日米や南米での文化活動やアイデンティティの表象等にも目配りした。

4. 研究成果

本研究は、新型コロナウイルス感染拡大による海外渡航制限で、海外調査の度重なる延期を余儀なくされたため、当初の3年間の研究期間が結果的に5年間(2023年3月終了)となった。調査が必ずしも当初のスケジュールどおりに実施できなかったものの、幸いにして研究期間の延長が好影響を及ぼした側面もあり、総合的に見れば予想以上の研究成果が得られた。具体的には、主たる研究対象(Japan House や移民メディア)がデジタル化などの対応や活用でいかにコロナ禍と向き合ったのかを定点観測できたこと、そして研究する側としても、海外調査ができない中でもオンラインイベントに参加する形でいかなる代替調査ができるかを試行錯誤する中で、研究開始当初の予想とは異なるサブテーマの発見や予期せぬデータも得ることができ、研究方法の面でも手応えが感じられた。以下、本研究の主要な柱(Japan House 研究、移民メディア研究、研究遂行中に見出した新たな研究課題と今後の課題)ごとに、一連の成果を概略する。

(1) Japan House に関する研究

研究期間内に全ての Japan House の関係者にインタビュー調査ができたことは大きな収穫である。Japan House São Paulo では、首脳陣(元館長でアドバイザーの Angela Hirata をはじめ、副館長、文化スーパーバイザーなど)へのインタビュー実施に加え、デカセギ移民帰国者の日系ブラジル人専属職員4人を紹介いただき、聞き取りを行なった(詳しくは後述)。

Japan House London では、Michael Houlihan 館長をはじめ、プログラミング・ディレクターと広報およびコミュニケーション担当に聞き取りを実施した。Japan House Los Angeles では、海部優子館長をはじめ、チーフ・プロジェクト・マネージャーおよびマーケティング/PR 局長の3人をインタビューした。

ここではインタビューの詳細や3館の比較考察については省略するが、施設間の最大の違いは現地の日系移民社会の有無と密接に関連しているという傾向が見られた。いわゆる日系移民社会が存在しない英国に開館したロンドン館、日系移民社会は存在するがその中心地である Little Tokyo から離れたハリウッド地区に位置するロサンゼルス館に比べ、世界最大規模の日系移民社会の存在が際立つブラジルに開館したサンパウロ館では、明らかにロンドンとロサンゼルス姉妹館とは異なる多様な「Japan」の発信が試みられているように見受けられた。その最も興味深い具体例は、2018年4月より6月まで開かれた、「Oscar Oiwa Paradise - Drawing the Ephemeral」という企画である。公式記録によれば、「移民110周年をとらえ、日系2世であり、日本及び日本の現代アートシーンでその才能を磨いた大岩オスカー氏の特別なインスタレーション“パラダイス”を展示。360度に描かれた作品の中に入り込むことで、作品と一体となったユニークな体験を実現しました」(JAPAN HOUSE 実施報告書 2021年3月発行、53頁)。

どの Japan House も原則としては「日本/日本人」の「魅力」を「世界」に向けて紹介することを目的としているなか、サンパウロ市出身の日系ブラジル人である Oscar Oiwa が Japan House の企画で認められたことの意味は大きい。なぜなら、このような企画が実現したのは、まぎれもなく、ブラジルに多数の日系移民が在住し、日本からの移住110周年という周年祭も追い風として働いたからだといえよう。

もう一つのサンパウロ館ならではの企画の事例は、原爆(広島・長崎県人会共催)の特別展である。ブラジルには各都道府県の県人会による活動が今でも活発であるが、原爆というテーマでの企画展は、この「県人会」という日系移民独自の団体があってこそ実現したと言える。

しかし本研究での最大の発見の一つは、サンパウロ館の職員として、日本の工場等で働いた日系ブラジル人の子孫、すなわち日本で育った「デカセギ帰国者」が複数名働いていたことである。デカセギ現象は労働や経済の観点から論じられることが多いが、このブラジルから日本への1980年代以降の移住現象によって、「移民第二世代」あるいは「1.5世代」と呼ばれる若年層のブラジル人が「日本」を知り、「日本語」や「日本文化」に触れたことによって、ブラジルに帰国後に Japan House の常勤職で活用される貴重なバイリンガル人材になり得たのである。

本研究では4人のそういうデカセギ帰国者にインタビューしたが、4人とも Japan House に就職したことに誇りを抱き、広報文化外交の最前線に立っていることにやり甲斐を感じていると話してくれた。

なお、詳述はしないが、サンパウロ、ロサンゼルス、ロンドンの3館とも、新型コロナウイルス感染拡大による行動制限という不測の事態への対応として、様々なオンライン企画を実施したことは特筆に値する。また、比較考察の材料として、開館して間もない Centro Cultural Coreano(韓国政府による、Japan House と同様の趣旨のワンストップ型文化外交施設)を見学、そのキュレーターをインタビューした。さらに韓国フェスティバル(Festival Coreano)も見学した。Japan House と韓国によるこの新たな文化外交施設の最大の共通点は、それぞれの移民が集住する旧中心街ではなく、一般市民が気軽に足を運びやすいサンパウロ市内のビジネスの中心地として知られるパウリスタ大通りに位置していることだ。「クール」で洗練された「日本」あるいは「韓国」のイメージを発信するのに相応しい場所選びの方針が明確である。

(2) 移民メディアに関する研究

本研究のもう一つの柱は、激変とも言える転換期を迎えていたブラジルの日系移民のメディア業界の最新事情と課題の把握、そして中国系や韓国系の新聞の基礎情報収集や関係者へのインタビュー調査であった。

まず、興味深いのは、サンパウロ市内の東洋街に中国系と台湾系の印刷媒体がそれぞれ発行されていることである。『Jornal Americana 美州華報』は中華人民共和国寄りの新聞で、『巴西華人资讯网』という雑誌(ビジネス誌)は台湾系の読者を主なターゲットとしている。両社の関係者をインタビューしたが、読者や広告主が棲み分け状態になっているからなのか、互いに他者を競合相手として意識していない様子であった。

また、サンパウロ市ボンヘチーロ地区(旧中心街)にある二つの代表的な韓国系新聞、『Hannin Today』と『Hannaro』の編集部に聞き取りを行なった。この地区は、韓国系の繊維業者やアパレルの生産・販売者が多いことで知られているが、同じ読者層を競う形で2社の新聞が共存できていることは、韓国系移民社会の経済面での勢いを物語っている。2紙とも記事は韓国語のみで、あくまでも移民のための新聞という要素が強く、ブラジルで近年急増しているいわゆる「韓流(K-POP)」のファンを想定しているわけではない。こういう韓国ファンのニーズに応えているのは、若い世代に最も影響を有する情報発信をしている韓国文化センター(Centro de Cultura Coreana)である。ポルトガル語で「韓流」関連の多数の著書を執筆している Yoo Na Kim 館長に聞き取りを行なったが、韓国語や韓国文化に興味を抱くブラジル人が確実に増えていると話してくれた。

本研究で最も注視したのは、日系新聞の行方だ。サンパウロ新聞の廃刊以降、唯一の日系移民紙として生き残った Nikkey Shimbun(ニッケイ新聞)が2021年、ついに廃刊となった。しかし、ブラジルから日本に「デカセギ労働者」を派遣することで成長した著名な日本の企業家がこの新聞を買取り、新聞名を『ブラジル日報』(Brasil Nippo)と改める形で、2022年に再スタートをした。編集長や編集部の一部は引き継がれ、新聞の基本的な編集方針も維持された。一方で、深沢正雪編集長をインタビューしたところ、若い世代の記者を雇用することによって、記事の内容の多様性の確保だけでなく、今後はデジタル時代の可能性を積極的な探りたいという。むろん、

経営面での課題は山積しており、見通しが明るいとは言いが、今後の展開を見守りたい。

(3) 研究遂行中に見出した新たな研究課題と今後の課題

3-1. 日中韓の「東洋系」アーティスト集団による地位向上運動

本研究の主題の一つは、中南米の大国ブラジルにおいて、日中韓の「官民」がいかなる広報文化外交的な活動を展開しているかを見極めることであった。しかし、研究を進める中で、想定外の関連活動やトピックを見出した。その中で最も興味深い事例は Coletivo Oriente-se (以下、Oriente-se と省略) というアジア系芸能集団である。2019年8月のブラジル調査で Oriente-se の創立者3人にグループインタビューができたので、この事例について簡潔に紹介する。

Oriente-se は2016年の8月末に初回が放送されたブラジル最大のテレビ局 Globo の連続ドラマ Sol Nascente の俳優陣のキャスティングで日系人俳優が起用されなかったことに対して、東洋系の俳優が抗議運動を起こしたのをきっかけに形成された集団である。以降、日系人のイメージ向上に向けた運動体として、知名度と影響力を増している。

Globo がノヴェーラ(連続ドラマ)史上初めて日系移民を題材にしたノヴェーラを制作すると公表したため、日系人のタレントや俳優たちは、晴れの舞台で主人公を演じられるかもしれないという一世一代の機会に胸を膨らませた。しかし、その配役は物議を醸した。日系人一家の「家長」カズオ・タナカ役は、一旦は日系人俳優のケン・カネコに決まりかけた。カネコはチズカ・ヤマザキ監督の『ガイジン』にも出演している、長いキャリアを積んできたベテランである。ところが結局は東洋系の顔立ちには程遠いリス・メロが抜擢された。メロはイタリア系のベテランの俳優で、その演技力には定評があるものの、カネコが大手紙 O Estado へのインタビューで皮肉っているとおり、「私にドイツ人を演じさせるのと同じような大変さを(メロは)味わっているだろう」。Globo はこの役柄は「日本人とアメリカ人の孫」と公表しているが、それはメロが全く日系人っぽくないことを正当化するためだと揶揄する声が上がった。タナカの娘でヒロインのアリセ役に人気女優のジオヴァンナ・アントネーリが起用されたことも問題視された。「実子ではなく、養子なので日本人の顔立ちをしていない」というのが Globo の説明であった。他方、脚本家は「スター級の日系女優が見つからなかった。ノヴェーラはとにかくお金がかかるので、確実に視聴率を死守しなければならず、ジオヴァンナなら大丈夫だと思った」と、本音を露わにした。

このドラマのキャスティングが騒動に発展した最大の理由は、日系、韓国系、中国系などの俳優から成る集団、Coletivo Oriente-se (Oriente-se は方向性を見つけるという意味だが、東洋系を意味する Oriente と語呂合わせをしている) が声を大にして抗議したからである。団体設立の準備は2006年の4月に始まったが、公式な設立はまさに Sol Nascente 放送開始の翌日、9月1日であった。彼らは「オリエンタル系を外国人扱いするのは差別である。私たちは他のブラジル人俳優となんら変わりなく、どんな役でもこなせる」と主張した。それを証明するかのようになり、3人の日系人女優がマリリン・モンローに扮している動画もユーチューブで公開した。

グループインタビューした3人はいずれも「ブラジルでは日系人はほぼどの職業や業界においても成功していると思われるが、芸能界や俳優業は例外で、全く成功しているとは言えない。テレビCMにしても、主人公にはさせてもらえない」と口を揃えた。Kによれば、「Mestiços (日系人と非日系人の「混血」)の俳優は私たちよりももっと苦戦している。私たちははっきりと「オリエンタル系」のステレオタイプにはめられるが故に、良くも悪くもそれに当てはまる役が回ってくるが、mestiços は中途半端な容姿だというふうにマイナス評価されている。」

この状況を打開する方法として彼らが思いついたのが、日系人のみならず他のアジア系コミュニティの俳優(台湾系、中国系)と連帯して、オリエンタル系の俳優の苦悩を発信し、地位向上を図ることであった。テレビドラマ Sol Nascente のキャスティングをめぐる騒動の最中に Oriente-se 運動を立ち上げれば、世間の注目度が上がるだろうという判断から、戦略的にドラマの放送に合わせて声明文や声明動画を公開したという。

2019年現在のコアメンバーは約20人という。Oriente-se の知名度を上げた一つの大きな要因は、彼らがユーチューブに投稿した数々の動画である。これらの動画では、ユーモアを交えて日系人や東洋系に対するステレオタイプに疑問を投げかけている。しかし、Kによれば、動画投稿を増やすべきだと思うメンバーもいるものの、自分は増やすべきではないという。その理由は、動画はあくまでも自分たちの俳優としてのメッセージを伝えるツールとして位置付けられるべきであり、ユーチューバー集団なのだとは誤解されたくないからだという。

本報告では深めないが、Sol Nascente に対する Oriente-se の抗議運動で、メディア報道で流行したキーワードは Yellowface (イエローフェイス) である。これは米国の Blackface (ブラックフェイス = 黒塗りメイク) に由来し、かつて米国映画において白人俳優が顔を黒色で塗って黒人役を演じたことを問題視する言葉である。Sol Nascente においても、日系人役を演じた俳優は目を細く見せるメイクによって東洋人っぽさを強調したが、これがイエローフェイス的で日系人を蔑視する演出と見なされた。Oriente-se のメンバーたちは、こういうイエローフェイス的な演出が当然視され続ける限り、日系人俳優の出演の可能性が削がれると主張する。

3-2. 在日ブラジル人の「民間外交者」に関する公開シンポジウムの開催

本研究の特色ある試みの一つは、科研費公開シンポジウム「“グローバル人材”としての移民と共生社会の可能性を考える ～ 4人の民間外交実践者の経験～」(2020年2月9日、武蔵大学。

白水がコーディネーター兼司会進行を担当、イシがコメンテーター兼キャスティングを担当)を開催したことである。約30名が参加し、ディスカッション時間には参加者からも積極的に質問やコメントが行われた。

この公開シンポジウム実施にあたっては、複数の狙いがあった。一次的には、日本在住の複数のメディア関係者およびメディア・サポーター(広義の民間外交実践者)の経験談や提言を一般市民(日本社会)に届ける場を設けることであった。しかしそれに留まらず、二次的な狙いとして、あまり接点の機会がない各エスニック集団のこのようなキーパースンが互いに知り合い情報や問題意識を共有する場を設けることであった。三次的には、登壇者の希少かつ貴重な発言を本研究のデータとして活用することであったが、個別のインタビューや聴衆のいないクローズなグループインタビューよりも、公開シンポジウムという形式は研究成果の社会への還元という意味で絶大な効果を発揮したと考えられる。

4人のゲストスピーカーは、段躍中(日本僑報社編集長、中国出身のジャーナリストで出版社オーナー)、エンピ・カandel(ユニバード株式会社代表取締役、ネパール系コミュニティのビジネスリーダー)、エリオット・コンティ(一般社団法人グローバル愛知事務局長、米国出身で多文化共生に関わる人々をPodcastによるインタビューシリーズで発信)、シルビア・キクチ(ポルトガル語情報誌Alternativa編集長、ブラジル系コミュニティ有数のインフルエンサー)であった。段氏は日本人と中国人の交流促進の諸活動を詳しく紹介、カandel氏は「外国人材=グローバル人材」採用のコンサルティング経験からの知見を紹介、コンティ氏は留学生就職支援の課題やデジタルメディアによる情報発信の可能性を紹介、キクチ氏は移民メディアが直面する課題や展望を紹介した。

3-3. その他の特色ある活動

本研究で得られた知見を政策提言に生かすという意味では、出入国管理庁主催の「第4回『国民の声』を聴く会」(2019年11月8日、法務省内の非公開会合)に報告者の一人として招かれて、移民の社会統合のための多言語での情報提供など様々な課題について提言できたことが挙げられる。その後、同庁が「外国人材の受入れ・共生のための総合的対策」の一環として実施した「在留外国人に対する基礎調査」政府が在住外国人のニーズを把握し、今後の政策に反映させるのを目的とした大規模の調査)に関する有識者会議の構成員も務めた。

次に、駐日ブラジル大使館による、「在日ブラジル人コミュニティ30周年記念事業」への貢献が挙げられる。具体的には、2020年7月にオンライン開催された30周年記念シンポジウムに登壇し、「在日ブラジル人30周年に関する考察」という題名で講演した。次いで、駐日ブラジル大使と、国内の3つの総領事館の総領事とのパネルディスカッションにパネラーとして参加した。

また、NHKが制作した特別番組「ワタシたちはガイジンじゃない!」に無償でコンサルティングと資料(情報及び写真)を提供した。同番組は在日ブラジル人30周年を記念して作られ、BSチャンネル及び総合チャンネルで放送された。

4. おわりに

新型コロナウイルス感染拡大によって生じた様々な問題は、現地調査の期間の見直しに留まらず、本研究の仮説や課題設定にも影響を及ぼした。例えば、当初の予定では、移民メディアの関係者に文化外交論の観点からの質問を投げかけたりしてその可能性を探ることを想定していた。しかし、サンパウロの日系移民新聞の場合、従来からの構造的な不況に加え、パンデミックによる不況がさらに追い打ちをかけて経営危機を深刻化させた。一寸先は闇という状況に追い込まれている新聞関係者に、広報文化外交としての可能性や日伯両国間の橋渡しの役割などの話題を持ちかけるのは無神経だと判断した。新聞関係者からすれば、その存続自体に「理屈抜き」の絶対的な意義があるという自負もあり、この報告文を執筆している時点でもブラジルの日系紙が存続できていることは、両国の文化外交関係者にとっても、移民社会にとっても、心強いことであることに疑いの余地はなからう。実は、存続という意味では、Japan Houseも例外ではなく、政府からの資金のみに永久に頼れないなか、いかに財政面で持続可能な体制を整えるのかというのは3館の共通の課題である。

Japan House研究の最大の発見は、サンパウロ館でのOscar Oiwaの起用例だろう。日系移民の子孫も「日本代表」として広報文化外交に活躍できるという可能性を示す、画期的な出来事として捉えることができる。

研究で得られた知見の一部を科研費公開シンポジウムという形で社会還元できたことは嬉しい限りである。また、市民向けの公開講座や世界各国の日系移民社会のリーダーが結集する海外日系人大会での基調講演のスライド、さらには駐日ブラジル大使館主催の在日ブラジル30周年記念シンポジウムに登壇した際に、サンパウロのJapan Houseに就職した日系ブラジル人のデカセギ帰国者に関する紹介を盛り込むことによって、本研究の成果を学界以外の一般市民と共有することに努めていることも最後に特筆したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 アンジェロ イシ	4. 巻 41号
2. 論文標題 在日ブラジル人一世”研究者から見る青少年の人間形成”移民を背景とする青少年の自己形成 当事者の視点、支援者の視点、研究者の視点	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中央大学人文研ブックレット	6. 最初と最後の頁 11-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 アンジェロ イシ	4. 巻 28号
2. 論文標題 シンポジウム報告5 コロナ危機と在日ブラジル移民の“失われた30年”、そして移民研究の次なる30年」小特集「日本移民学会創立30周年記念シンポジウム報告“日本移民学会の未来 移民研究は如何に現代の課題に貢献できるのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 移民研究年報	6. 最初と最後の頁 111-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Angelo Ishi	4. 巻 -
2. 論文標題 Reflexoes sobre os 30 anos dos brasileiros no Japao e um estudo de caso sobre a percepcoes dos migrantes a respeito do programa de “ajuda de retorno voluntario”.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 30 anos de brasileiros no Japao. Brasilia: FUNAG.	6. 最初と最後の頁 91-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 アンジェロ イシ	4. 巻 -
2. 論文標題 移民とグローバルな人の移動 国際航空と9.11と在日外国人の接点とは	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『グローバリゼーションと変わりゆく社会』北樹出版	6. 最初と最後の頁 17-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shigehiko Shiramizu	4. 巻 -
2. 論文標題 Shige's Talk-story: It all started when I met Mr. & Mrs. Sakima.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Hawaii Ginowan Shijin Kai website: https://sites.google.com/view/ginowanhawaii/talk-story	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンジェロ イシ	4. 巻 別冊 (特集号)
2. 論文標題 デカセギ移民現象20周年に関する考察 ある在日ブラジル人の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 武蔵大学総合研究所紀要別冊(特集号): 『移民と離散の諸相: 歴史と現代』	6. 最初と最後の頁 47-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンジェロ イシ	4. 巻 5月号
2. 論文標題 移民をチーム日本に迎えるには～ 「在日ブラジル人1世」の提言	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊Journalism (朝日新聞社)	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンジェロ イシ	4. 巻 第6号
2. 論文標題 ブラジル出身のデカセギ日系移民による旅行記と“旅”の意味づけ モーターサイクル・ボーイによる3K旅行と“百年の旅路”に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新社会学研究	6. 最初と最後の頁 88-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンジェロ・イシ	4. 巻 -
2. 論文標題 ブラジル人：デカセギ時代の起源と終焉 時間、空間、階層をめぐる模索	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小林真生編著『変容する移民コミュニティ時間・空間・階層』明石書店	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンジェロ イシ	4. 巻 第25号
2. 論文標題 映像から考える「スポーツと移民」『サンゴーヨン サッカー』と『イッポン：完璧な技』を手掛かりに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本移民学会編『移民研究年報』	6. 最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンジェロ イシ	4. 巻 12月号
2. 論文標題 多文化共生時代に問われる日本の覚悟	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊公明	6. 最初と最後の頁 60-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンジェロ イシ	4. 巻 536
2. 論文標題 "外国人"との共生社会を実現しよう！ ～ 外国人は「人材の宝庫」発想転換し積極活用を	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中日懇話会報（中日新聞社）	6. 最初と最後の頁 3-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンジェロ イシ	4. 巻 22
2. 論文標題 移民受け入れとジェンダー ~ 在日ブラジル人の事例を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ジェンダー研究	6. 最初と最後の頁 31-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンジェロ・イシ	4. 巻 2018年5月号
2. 論文標題 小さな節目としての"移民110周年"と危うい節目としての"デカセギ30周年"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本ブラジル中央協会発行『ブラジル特報』	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンジェロ・イシ	4. 巻 -
2. 論文標題 在日ブラジル人/デカセギ移民：帰国支援事業の受給者に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本移民学会編『日本人と海外移住』	6. 最初と最後の頁 215-234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンジェロ・イシ	4. 巻 199号
2. 論文標題 総論 雇用危機から 10年 ~ デカセギ史の終わりか、新たな時代の幕開けか~	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 移住者と連帯する全国ネットワーク発行『M-Net』	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白水繁彦	4. 巻 35号
2. 論文標題 エスニック・メディアの社会学的研究：ハワイ日系新聞最盛期の新聞人の事例	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 駒澤大学ジャーナリズム・政策研究所『研究所年報』	6. 最初と最後の頁 85-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白水繁彦	4. 巻 Vol.23
2. 論文標題 ウチナーンチュ・ボランティアのアイデンティティと民族文化主義-ハワイの「オキナワン・フェスティバル」における半構造化インタビュー【 】-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部『Journal of Global Media Studies』	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白水繁彦	4. 巻 Vol.24
2. 論文標題 ウチナーンチュ・ボランティアのアイデンティティと民族文化主義-ハワイの「オキナワン・フェスティバル」における半構造化インタビュー【 】-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部『Journal of Global Media Studies』	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 SHIRAMIZU, Shigehiko	4. 巻 21
2. 論文標題 A Sociological Study of Ethnic Media A case of Hawaii's Japanese newspapers before WWII	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 武蔵大学社会学部発行『ソシオロジスト』	6. 最初と最後の頁 101-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計39件（うち招待講演 28件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 開催校企画シンポジウム「ウチナーネットワークの課題と可能性」第1部コメンテーター
3. 学会等名 日本移民学会第33回年次大会@神田外語大学（2023年6月25日）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 白水繁彦
2. 発表標題 開催校企画シンポジウム「ウチナーネットワークの課題と可能性」第2部コメンテーター
3. 学会等名 日本移民学会第33回年次大会@神田外語大学（2023年6月25日）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 外国人労働市場の変化と在日日系社会の挑戦
3. 学会等名 財団法人海外日系人協会主催「令和4年度在日日系人のための生活相談員セミナー」（基調講演）於：JICA横浜、2023.3.10（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 白水繁彦
2. 発表標題 増加する在日外国人：社会統合 試論
3. 学会等名 駒澤大学特別講座（オンデマンド配信、2023年2月29日より3月19日まで公開）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 “外国人”が直面する壁と共生社会への挑戦：在日ブラジル人1世の視点から
3. 学会等名 埼玉大学人文社会科学部研究科・中本研究室主催 多文化共生推進シンポジウム基調講演(2022.12.14) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 移民研究の楽しさと難しさ：在日ブラジル人の旅行記と”旅”の意味づけに関する事例研究を手がかりに
3. 学会等名 日本移民学会冬季研究大会(2022.12.10 京都アカデミアフォーラムin丸の内)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 報告「在日ブラジル人一世」研究者から見る青少年の人間形成」
3. 学会等名 公開研究会「移民を背景とする青少年の自己形成 当事者の視点、支援者の視点、研究者の視点 (2022年11月7日、オンライン (Zoom)。主催：中央大学人文科学研究科) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 白水繁彦
2. 発表標題 エスニック・アイデンティティを考える：海外ウチナーンチュの事例から
3. 学会等名 駒澤大学GMSラボラトリ公開研究会2022年後期第5回@ZOOM 2022年12月18日 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 Os 30 anos de Brasileiros no Japao e a Questao dos Yonseis: Visao de Um Pesquisador que Fincou Raizes em Toquio.
3. 学会等名 国際シンポジウム Empregabilidade: Como yonseis e demais geracoes nikkei podem conquistar o mercado de trabalho. CIATE(厚生労働省国外就労援護情報センター)2022年10月9日、サンパウロ市(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Angelo Ishi
2. 発表標題 "Constructing a collective memory: how Nikkei Brazilian migrants are (re)interpreting their "history" in Japan." (Panel 31)
3. 学会等名 International Conference "Celebrating 10 Years of Research on Migration, Forced Displacement and Superdiversity." University of Birmingham (UK) 2022.9.16 アブストラクトによる選考有(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 在外ブラジル人向け政策の現状と課題: 外交官の " エージェンシー "、 " 日系人 " という要素に着目して
3. 学会等名 日本移民学会年次大会ラウンドテーブル「越境政治の国際比較 出移民と送出国家のトランスナショナリズム」(2022年6月26日、京都大学)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 『日本人と海外移住』 「在日ブラジル人/デカセギ移民」の章に関する補論:何が違って、何が変わらなかったか?
3. 学会等名 一般財団法人 日伯経済文化協会(ANBEC)読書会 2022.5.21(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Angelo Ishi
2. 発表標題 From global financial crisis to Covid-19 Pandemic: Old and new challenges for Nikkei Brazilians in Japan
3. 学会等名 UCLA Berkeley主催, Webinar, 2022年5月11日(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 公開シンポジウム「選ばれる国になるための新たな戦略」パネルディスカッション「日本社会が選ばれるための課題とは? 外国人のライフプランからの視点」パネラーパネラー
3. 学会等名 (公財)日本国際交流センター主催「外国人材の受入れに関する円卓会議」2022年2月14日(オンライン)(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 “在日ブラジル人1世”研究者から見る青少年の人間形成
3. 学会等名 中央大学「移民を背景とする青少年の自己形成」シンポジウム 2021年11月7日(オンライン開催)(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 “外国人”が直面する壁と共生社会への挑戦: 在日ブラジル人1世の視点から
3. 学会等名 第335回琉球フォーラム(琉球新報主催)2021年11月10日(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 “外国人”との多文化共生を考える：在日ブラジル人1世からのラブコール
3. 学会等名 岡山国際交流協会主催講演会 2021年10月30日（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 移民とパンデミック：在日外国人が乗り越えた“壁”とは
3. 学会等名 第72回武蔵大学公開講座 2021年10月9日（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 在住外国人と“情報”：コロナ危機、言葉の壁、多メディアの(不)可能性に着目して
3. 学会等名 兵庫国際交流団体連絡協議会主催, オンライン開催（2021年9月3日）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 「国際日系デー・トークショー：アーティスト大岩オスカル × サンパウロ、東京、ニューヨーク さすらうニッケイ・アイデンティティ」司会進行
3. 学会等名 (公財)海外日系人協会主催、2021年6月20日より公開： https://www.youtube.com/watch?v=8SK7vJ5RA1U （招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 コロナ危機と在日ブラジル移民の“失われた30年”、そして移民研究の次なる30年
3. 学会等名 日本移民学会第 30/31回年次大会「日本移民学会創立 30 周年記念シンポジウム」(オンライン開催) 2021 年 6 月 20 日
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白水繁彦
2. 発表標題 エスニック文化研究への道途：エスニック・メディア、エスニック・エージェント、民族文化主義
3. 学会等名 日本移民学会第 30/31回年次大会「日本移民学会創立 30 周年記念ラウンドテーブル」(オンライン開催) 2021 年 6 月 20 日
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Angelo Ishi
2. 発表標題 Reflexoes sobre os 30 anos dos brasileiros no Japao
3. 学会等名 ブラジル大使館 3 0 周年ウェビナー、2020年11月6日（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 どうなる、どうする移民政策（在日ブラジル人の立場から）
3. 学会等名 移住連全国フォーラム(6月2日)（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 移民研究(者)と入管法改正 - 日系(在日)ブラジル人の立場から
3. 学会等名 日本移民学会第29回年次大会(6月30日)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shigehiko Shiramizu
2. 発表標題 ハワイ沖繩系コミュニティにおける文化変容と架橋エージェント
3. 学会等名 Okinawan Festival (Hawaii Convention Center, Honolulu, Hawaii)8月31日および9月1日(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 基調講演「在日日系30年の歩みと日本の“多文化共生社会”」
3. 学会等名 第60回海外日系人大会(憲政会館、10月1日)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 在日ブラジル人デカセギ30年史
3. 学会等名 シンポジウム「デカセギ」の30年、過去から未来へ 日本におけるブラジル人コミュニティの過去と未来(静岡文化芸術大学、10月26日) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Angelo Ishi
2. 発表標題 Migration/integration policies in Japan from the point of view of "Nikkeijin": A focus on the Voluntary Return Program and the Visa for 4th generation descendants
3. 学会等名 国際シンポジウム「後発的移民受入国の国際比較 21世紀の移民受入れ政策をめぐるスペインの経験と日本のこれから」(11月16日, 一橋大学(招待講演)(国際学会))
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Angelo Ishi
2. 発表標題 The rise and fall of the literary and audiovisual production by Brazilian Nikkeijin migrants in Japan: A focus on the role of ethnic media
3. 学会等名 International Symposium "New and Old Diversity Exchange (NODE) UK-Japan" (Waseda University, December 4) (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 多文化共生の社会の中で、地域日本語教室に期待される役割
3. 学会等名 社会福祉法人さぼうと21主催「地域日本語教室ボランティアのための活動基礎講座」(文化庁委託事業)(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 大会シンポジウム「スポーツ×移民×映像～移民研究はどんなプレイができるか」趣旨説明およびコメント
3. 学会等名 日本移民学会第28回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白水繁彦
2. 発表標題 大会シンポジウム「スポーツ×移民×映像～移民研究はどんなプレイができるか」司会進行
3. 学会等名 日本移民学会第28回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 「諸外国の移民政策を学ぶ」第9回 「国境を越えるブラジル人」
3. 学会等名 移住連連続セミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 日伯の110年の絆 ～ 在日ブラジル人に関する特別展の解説を中心に ～
3. 学会等名 上智大学ポルトガル語学科同窓会主催講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 "ブラジル移民110周年"と"デカセギ30周年"を再考する
3. 学会等名 日本ブラジル中央協会主催講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 アンジェロ イシ
2. 発表標題 移民の時代 在日ブラジル人コミュニティとは？
3. 学会等名 ゲーテ・インスティテュート・ヴィラ鴨川主催Creators@Kamogawa (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 アンジェロ・イシ、白水繁彦、森本豊富、森茂岳雄、木村健二、坂口満宏、河原典史、三田千代子、石川友紀、蘭信三、早瀬晋三、李洙任、飯野正子、浅香幸枝	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 303
3. 書名 日本人と海外移住	

1. 著者名 白水繁彦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 御茶の水書房	5. 総ページ数 251
3. 書名 海外ウチナンチュ活動家の誕生：民族文化主義の実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>1) 科研費公開シンポジウム「“グローバル人材”としての移民と共生社会の可能性を考える:4人の民間外交実践者の経験」(2020年2月9日、武蔵大学。白水がコーディネーター兼司会進行を担当、イシがコメンテーター兼キャストイングを担当)を開催した。詳しくは別紙の研究成果報告文の「3-2. 在日ブラジル人の「民間外交者」に関する公開シンポジウムの開催」を参照されたい。</p> <p>2) イシは本研究期間中の2020年度以降、入管庁が「外国人との共生社会のための総合的対応策」の一環として年に一度実施している「在留外国人に関する基礎調査に関する有識者会議」の構成員として、調査項目の設定やアンケート結果のデータ分析に関するアドバイスをしてきた(第1回から第3回目まで)。2023年度の第4回についても引き続き構成員を務めている。</p> <p>3) イシは日本移民学会の企画委員長として、第28回年次大会の大会シンポジウムを企画し、白水がコメンテーターを務めた。主題は「スポーツ×移民×映像：移民研究はどんなプレイができるか」で、移民のスポーツ実践を映像メディアがいかなる形で表象し、東京五輪やサッカーW杯というスポーツ・イベントがエスニシティ、ナショナリズム、多文化共生などどのように関わるといえるかという点に着目した。これらの議論は本研究課題のキー概念である「移民」、「メディア」、「文化外交」などと深く関係している。登壇者の一人、日系ブラジル人の平野勇パウロ氏は、代表的な集住都市である群馬県大泉町において「多文化共生まち映画」という趣旨で制作された映像作品『サンゴーヨンサッカー』の意義や影響・反響について解説した。同作品の発案者であるプロデューサーの宮地克徳も報告者として招き、「フットボールと映画と多文化共生」というテーマについて解説していただいた。さらに、「スポーツ移民」の可能性を論じる上で示唆的なYoutube配信映画『イッポン：完璧な技』を上映し、その制作者である在日ブラジル人のエウアートン・トバセ監督が作品の趣旨を解説した。本企画の副次的な成果として、プロデューサーの宮地氏には学会誌に論考をご投稿いただけた。</p> <p>注：本報告に記載したポルトガル語の論文や研究発表は、オンラインシステム設計上の制限のため、アクセントなどの特殊なアルファベット表記を除いた形で記入せざるを得なかったことをおことわりしたい。</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	白水 繁彦 (Shiramizu Shigehiko) (80095942)	駒澤大学・付置研究所・研究員 (32617)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関